馮昭奎・愛知大学客員教授のコメント

馮昭奎

加加美先生の「現代中国学の新たなパラダイム――コ・ビヘイビオリズムの提唱」は大変重要な問題提起をなさる、示唆に富んだ論文だと思います。本コメントは論文のなかに提起されたいくつかの問題をめぐってコメントさせていただきたい。

一、中国問題の特殊性

中国国内変化の速さは現代中国研究を難しくさせる面がある。改革開放前後の変化の激しさは言うまでもないが、改革開放以降の中国も目まぐるしく変化してきた。とくに文化大革命が日本の中国研究に対して非常に大きな影響を与えた。当の論文が指摘したように、中国の改革開放以降、日本の中国研究界でかつての中国文革支持者、毛澤東支持者が「文革の実相を見ずに、一方的に中国と毛沢東を美化した」として激しい批判をこうむるようになり、そのなかで彼らは沈黙を強いられるようになったのである。

一部の外国人の文革研究は「非正常状態はあたかも中国社会の正常状態として捉えて中国を認識している」という問題があるではないかと費正清の指摘は注意に値する。

ヘーゲルが指摘したように、「中国はあらゆる例外の例外である。（西洋の）ロジックは中国問題に適用できない」。

まだ、中国に対して偏見をもつべきではない。そうしないと、どんな怪異な中国報道に対しても、「ない」と信じるよりもむしろ「ある」と信じるほうがよいと思考様式が流行っている。

二、当の論文は林武さんの一つ重要な論点を引用した。つまり、「非西欧世界」を研究対象にする場合、専門化、細分化された近代社会諸科学の「個別把握・個別科学」的な視角からではその現実が把握できなかったということである。それゆえ「非西欧世界」の研究としての「地域研究」は「総合的把握」が求められるのであり、「地域」としてのまるごとの理解が求められる、というのである。それは大変重要な論点だと思います。

日本人は「全体より部分を見て細かいところを掘っていくのが好きだろう」といわれている。そういう日本人の「好み」は、現代中国の「全体像」の把握をある程度で妨げているのではないか？

三、「オリエンタリズム」問題について

第二次世界大戦終了後、今日に至る世界の「地域研究」に根強い「オリエンタリズム」、つまり「西洋中心主義」とか「西洋優越主義」の弊を引きずったままの状況であるという指摘がある。

その「オリエンタリズム」はいまはやっている、いわゆる「中国脅威論」と「中国崩壊論」とも無関係ではない。

「中国脅威論」は実は20世紀50年代に、とくに岸信介内閣の時期にすでに出現した。まだ、「中国崩壊論」もかなり前の時期に出現した。しかし、何十年を経っても、中国は「脅威」になっていないし、「崩壊」もしていないです。「中国脅威論」と「中国崩壊論」を吹聴する学者が少なくないが、彼らはくりかえして「これから」中国は「脅威」になるだろう、「崩壊」に陥るだろうと、「学問研究」ぶりして主観的結論を下した。彼らは言う「これから」は実は半世紀の前にすでに使われ始めた言葉です。何回何回も「これから」

といい、「予言」と現実とはずれても、引き続きそういう現実離れの予言を繰り返している。

「中国脅威論」は「西洋中心主義」とどのような関係があるか？簡単に言えば、中国が発展したら、「西洋中心」を動揺させるか、あるいは西洋史上で何回もあった「覇権争い」を起こるかと心配している。中国の指導者と政府が繰り返し「覇を唱えない」と表明したにもかかわらず、中国が必ず西洋の覇権国の道を歩むと盲信している。一部の中国論者が「平和台頭論」を論じたら、「平和」という言葉が無視され、「台頭」という言葉だけが突出され、しかも中国の「台頭」は昔西洋の覇権国の「台頭」の道に辿るに違いないと信じられる。

「中国崩壊論」もまた、「西洋中心・西洋優越主義」とは無関係ではない。中国の発展過程でいろんな問題や歪みが発生しているのは事実だが、「未開の東洋、文明の西洋」の観点を持っている人々は、自分を中国に対して優越する位置に立って、自分自身の発展のプロセスに発生した諸問題を忘れて、ただ中国の発展のなかの問題を掴んで、これから中国が必ず崩壊するだろうと信じている。

東洋の国家としての日本の一部の研究者は一方は「西洋中心・西洋優越主義」に対して、アメリカから「日本異質論」といわれるほど受動的、受身な立場に立っているが（この場合には、日本と中国とともに「自我」だと考える）、もう一方は自分自身が「西側の一員」を強調し、中国を「他者」として、みずから進んで「西洋中心・西洋優越主義」の手伝えをし、自分を中国に対して優越する位置に立って中国研究を展開している。それはまさに一種の「二重の身分」ではないか？

四、「地域研究」と「国別学」について

当の論文は「地域研究」にかわって AAA 諸国研究を「国別学」として再確立することを提唱している。

「中国学」として再確立することには賛成ですが、やはり多層の研究、すなわちグロバールの問題、地域問題、国別問題、大国内部の地区別問題に関する研究はいずれも必要ではないか。中国社会科学院には、国別研究所はただ二ヶ所（アメリカ研究所と日本研究所）があるが、そのほか、多数の研究所はやはり共通性が強い地域に対する「地域研究」に従事する研究所で、頂点に立つのは世界全体の問題の研究に従事している世界経済と政治研究所がある。

五、「国策研究」について

当の論文で「国策研究」という言葉を何回も提起したが、いわゆる「国策研究」の重要性について、もう一度費正清の言葉を引用したい。1969 年費正清は中国問題研究の切実性を論じたとき、「アメリカがなぜアジアで次から次へと失敗した原因は、やはりアジアを理解していなく、誤った政策を実行したのである」。1979 年中米両国は外交関係を結ぶ以降、近現代中国問題はアメリカの中国研究の中心課題になった。アメリカの中国研究の動向は日本の現代中国研究に対して示唆にとんだものではないか？

最後、一言を言いたいですが、中国には「芦山の本当の姿を知らないのは、ただ私が山中にいたからである」という諺がある。日本の中国研究は中国にとっても重要な意味を持っていると信じている。日本の科学的な「現代中国学」の発展を大いに期待しております。